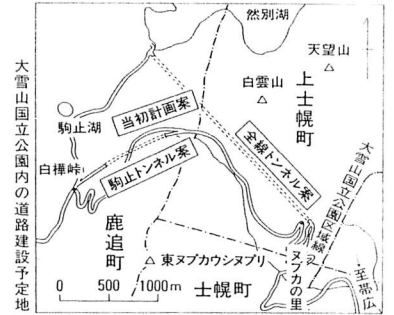


「地元」こそ活発な 論議を!

古き時代を引きずる必要論 地域づくり策を再検討の時

ルポライター
滝川康治

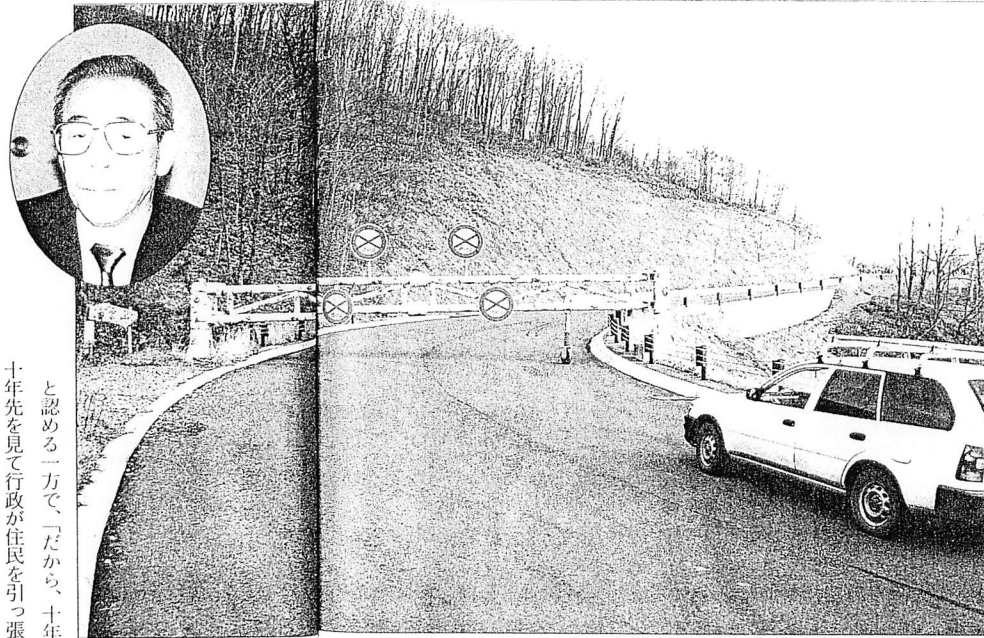


土幌高原道路(道道土幌然別線)の着工から34年、当初の建設目的が色あせるなかで、「行政の継続性」にこだわった計画が着々と進んでいる。自然破壊の批判を浴びるこの計画を、地元の人たちはどう受け止めているのか。土幌町などで生の声を聞いた。

観光開発を夢見る地元自治体

建設工事がストップしている土幌高原道路(道道土幌然別線)のゲートの近くに造成された観光拠点「ヌブカの里」。その一角にある広場に十勝平野を睥睨するように立つのは、立花隆の名著「農協」にも登場する、土幌農協を育てた元全農会長の太田寛一氏(故人)ら三人の銅像である。

六〇年代初め、この一帯の農地開発が始まったころに太田氏ら農村リーダーたちが練り上げたのが、「然別湖へ道路を！」の構想だった。土幌町内では唯一の観光資源といわれる土幌高原の開発や山火事対策などが、この道路の建設目的とされた。それから三十年あまりの歳月が流れて時代は大きく変



(上) 24年前から延伸工事が中断している土幌高原道路。ルート内にはナキウサギの生息地や風穴地が広がる。(左上)「観光開発で地域振興を」と力説する小川寅之助土幌町長

いか……。わたしは小川町長に、そんな話をした。

農協や商工会、青年・婦人団体などを網羅した「土幌町開発と自然保護の会」(森本辰蔵会長)という推進組織もあり、町役場の一室が事務局になっている。が、全町一丸で推進運動に邁進中かといえば、違う。底辺からの盛り上がりには欠ける。町長自身も、「残念ながら、道路は今すぐ町民に利益も被害もたらさない。効果論を理解せよ！」と町民に言っても、そう簡単なことじゃない。

中断していた計画が再開へ

土幌高原道路は、大雪山国立公園の東南の一角に神秘的なたずまいを見せる、鹿追町内の然別湖につながる道路のひとつである。

然別湖周辺の高山植物や野生生物の

と認める一方で、「だから、十年、二十年先を見て行政が住民を引っ張ることが大事だ」と力説した。有力者主導の運動という印象が強い。

九三年三月に北大自然保護研究会が土幌町と鹿追町で実施した、高原道路のアンケート結果がある。土幌では四百三十戸の有効回答があり、「賛成」とどちらかといえば賛成で約六一%を占めた。鹿追では二百三十戸のうち、約五二%が「反対」「どちらかといえば反対」と答えたのは対照的である。それから四年近くになるが、行政と巨大農協という二大勢力の狭間で、土幌町民の本音が語られる機会がきわめて少ないようだ。

生育・生息地などは、道の自然環境保全指針のなかで「すぐれた自然地域」に指定されている。然別湖への既設の道路は、帯広市・鹿追町方面から、土幌町の糠平温泉方面の二方向から

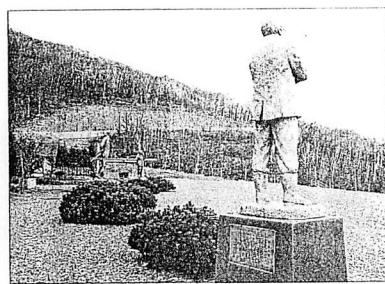
貌しているが、「開通促進」を唱える地元自治体などの開発願望に根本的な変化は見られない。

「町長就任から十年になるが、(公務のなかで)高原道路の占める分野は四分の一はあった。町民が反対し、『町は間違っている』となったら、いつでも自分分は退く腹だ」

と胸を張る小川寅之助・土幌町長が最も期待するのは、道路開通による地場産業への波及効果である。

「過疎が進むなかで農業も商業も成り立つ方策を講じなければならぬ。土幌にとって唯一の観光地の「ヌブカの里」を足がかりに、素晴らしい農業を体験してもらい、観光産業を振興したい。流入人口を増やし、その人たちが消費することで地元の産業にも潤ってほしい」(小川町長)

湖や有力な温泉のない土幌町が、観光に期待する心境を理解はできる。自然破壊を企図して「開通促進」を陳情してきたでもない。が、農業体験を売り物にした町づくりは道路がなくても可能だし、過疎化はここだけの悩みではない。逆に、「農協王国・土幌」は、道内の先頭を走る恵まれた農村ではな

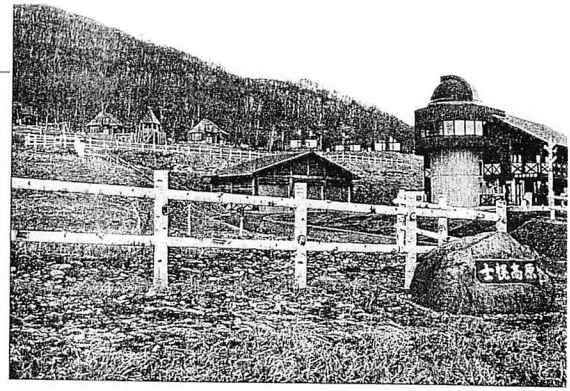


十勝平野を睥睨するようにして立つ太田寛一ら3人の盟友の銅像

のものがある。土幌高原道路は、東ヌブカウシ山の北側を通過する形で、土幌町方面から然別湖に短縮連絡する三番めの道路といえる。

一九六二年に牧場用の町道として開削したのが始まりで、六九年には道道に昇格した。六五年から工事箇所が国立公園区域にかかるようになり、当時の厚生省が法律に基づく一括許可を行なって、国立公園事業として承認。しかし、工事が急斜面の山肌を削り取るにしたがい、醜い姿が遠くからも望見できるようになった。

予定地内には高山植物のコマクサの自生地やナキウサギの生息地があることも分かり、自然保護論議が起きた。



士幌観光の拠点を目指す「ヌブカの里」。左上の山に高原道路が走る

る。そして昨年、環境庁の自然環境保
全審議会は、「環境への影響について十
分な調査検討を行なうこと」など三つ
の付帯意見を付けて、道の全線トンネ
ル案を承認してしまった。

これが士幌高原道路問題のごく大雑
把な経過である。が、二十年あまりの
中断の時代を経たにもかかわらず、工
事再開に向けた環境は整っていない。
「今後の年次調査のスケジュールは具
体的に見えてきていない。だから、着

引き継がれるボスたちの意思

士幌町糖平に住む三木潤さん(62)
は、三十七年間勤めたJA士幌町を退
職した六年前まで、士幌で暮らした。
「わたしは生活上必要があり、経済的
なメリットや地域の活性化が明らか
なものならば、高原道路に反対する気は
ない。でも、長年住んでみて、どう考
えても納得できる建設理由がなかつ
た。地元の人で『必要だ』と思ってい
る人は、あまりいないでしょうね。税
金は他の使い道があるんじゃないか」
と語り、士幌はボス支配の強い町、
と言い切る。

「社会情勢が変わったのに、三人の盟

工年次は明言できない(帯広土木現業
所) というのが実態だ。

行政改革の動きも絡んで、「本当に必
要な事業なのか」が改めて問われて
いる。自然保護団体の署名運動に対し
て十二万人を超える反対署名が集ま
り、十一月二十八日には「大雪山のナ
キウサギ裁判」の口頭弁論も始まった。
道民ぐるみの議論が求められる時期を
迎えている。

友の銅像で象徴される、昔のボスたち
の意思を引き継いでいる。「太田寛一
氏ら」先輩が残した仕事を仕上げなけ
ればならないというのが、道路を造
りたい最大の理由。いったん決めたこ
とを引つめたのでは、道や町の沽券



士幌町内に立つ推進団体の看板

ンときた。

「町民の大半が反対」など根拠の不明
瞭なものがあつた。特にひどいと思つ
た六人を挙げて、「町づくりに対する非
難を、そのまま展示すること」を町は
黙っているのか」と町教委に申し入れ
た(同会事務局の平松勉さん)。

結局、写真展の実施を優先させた主
催者側が折れる形で、六人のメッセー
ジが外された。一連の経過について、
ふあんくらぶ会員向けの通信に「残念
だった。反対意見の展示は認められな

道路がなくても観光は可能

高原道路の「地元」を標榜するのは、
士幌、鹿追、土士幌、音更の四町であ
る。士幌以外の「地元」で聞いた。
「地元のため」を大義名分にしている
が、ヒアリングなどはやられていない。
(行政関係者や政治家らはみんな真実
いものにフタで、傷つくのは北海道

にかかわる、と。そこにこだわってい
る面が強い」(三木さん)

こうした話を裏付けるかのように、
わたしの取材に対して、高原道路に批
判的な町民たちは、「匿名でないと困
る」と口をそろえた。「言いたいことは
山ほどあるが、名前を出すと圧力がか
かる」と話す人もいた。
ある中堅農家は、町側の「農業活性
化のための道路」という主張に対して、
こう反発する。

「農業できちんとやれる手立てをすれ
ば観光に頼らなくてもいい。気まぐれ
な観光客相手の商売に血道をあげるこ
とはない。客相手に道路をつけて自然
を破壊したとなると、泣いても泣き
れないんだよ」

太田組合長時代の三十数年前、士幌
高原にロープウェイやシカ牧場を開設
する話を耳にしたことがある。
「その時代の話をずっと続けている。
百姓も所得が伸びて、すべてが農協ま
かせになり、高原道路にしても『それ
でいこうや』となる。人間や自然に対
する考え方をきちんと持てば、こんな
道路はいらないんだよ」
と、作業の手を休めて言った。

タブー視される道路の是非論

ある四十代の町民は、
「賛否以前に自然や町のあり方につい
て自由な議論をする基盤がない。民主
的な言論の自由がほしい。批判的な意
見に対して、経済的な圧力をかけられ
た事例もある。見て見ぬふり、町民同
士の議論がタブー視される傾向がある」
と指摘して、こう提言する。

「議論を急がないで、(町長らの)孫た
ちの世代まで凍結してはどうか。その
間に、町づくりや、与かった国立公園
の財産の守り方を議論するとい。観
光客を引き込みたいのならば、もっと
先進地に学ぶべきだ」

五十代のある商店主は、「高原道路は
余分なこと。でも、地元の人とこうし
た話はほとんど交わさない」と漏らし、
「文明は快適になっているが、文化は
減びていつている」と嘆いた。

「(高原道路の走る)国立公園は最後の
牙城であり、ギリギリのところは線を
引かなければ……。ホテルもトンボも
ナキウサギも、みんな結びついている。
植物の共生のバランスがトンネルで切
られ、自然界の循環が崩れる。単なる

「自然を残せ!」や、賛成・反対の喧
嘩腰でなく、チェック&バランスの感
覚を大事に、子々孫々のスパンで物事
を考えるべきでないか」
と、現状の議論のありように対して
も注文を付ける。

こうした生の声を、わたしのような
第三者に言えても、町民同士が自由に
語り合える雰囲気にならなければ、士
幌の将来は暗いのではないだろうか。

町の体質を示す、ひとつの出来事が
あつた。ナキウサギを天然記念物にす
る活動などに取り組んでいる、ナキウ
サギふあんくらぶ(市川利美代表・会
員約千人)の移動写真展に対して、推
進側からクレームがあつたのである。

この展示会は公募で集まったナキウ
サギの写真六十九点をメッセージとと
もで紹介するもので、道内各地で開催
中。士幌展は九六年九月に開かれた。

公共施設を管理する町教育委員会は
五月に使用を許可した。が、八月下旬
新得町の展示会場を訪れた「開発と自
然保護の会」の会員が、写真に付いて
いる道路反対のメッセージを見てカチ



「計画には自然への畏敬の念がない」と憤る崎野隆一郎さん

い」という町側の理由は、およそ納得
のいくものではなかった」旨の一文が
載つた。

「道路推進」掲げる人たちが神経を
とがらせる気持ちは分からぬでもな
い。が、事前検閲のようなやり方は表
現の自由を侵すものだし、やはり行き
過ぎた対応だろう。わたしは小川町長
に、「度量が小さいのではないか」と
言ったが、町長から反省の弁はなかつ
た。ちなみに、士幌以外の町でクレ
ームがあつた話は聞かない。

の自然、得するのは土建業者という構
図なんですよ」

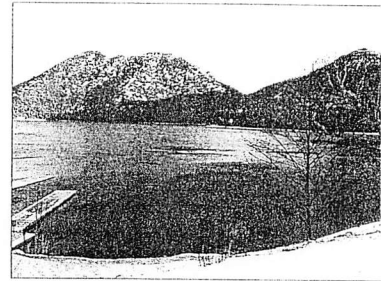
こう言つて憤るのは、「然別湖ネイ
チャーセンター」の責任者・崎野隆一
郎さん(39)である。「高原道路は必要
ない」が湖畔関係者の大勢という。
建設目的に対して、崎野さんは次の
ように反論する。

「災害時の短縮代替ルート確保」と
いうが、八一年にあつた百年に一回規
模の大雨と台風のとときで、然別湖
への道路は何ともなかった。林道など
代替ルートもいくつもあつた」

「道路があれば然別湖にお客さんが来る時代ではない。地域のシンボルの白雲山の手つ腹に穴（トンネル）を開けることの愚かさを、みんな分かっている。ナキウサギへの影響など、分からないことだらけだ。（土現などは）自然に対する畏敬の念がない」

同センターは十年前、湖畔にある二つのホテルが共同出資して設立した。トレッキングやカヌー、熱気球などのプログラムを用意し、雄大な然別の自然を観光客に楽しんでもらっている。現在の利用客は年間約二万五千人。イグルーづくりなど冬のイベントを全国に発信しており、「高原道路がなくても冬の客を確実に伸ばしてきた」（崎野さん）との自負もある。

「然別湖は、チラリズム、がいい。自然の持っている神秘的な部分を魅力に感じて、お客さんがくる。ゴールデンウィークや夏休み、紅葉の時期には交通渋滞になり駐車場も満杯なのに、もう一本の道路はいらぬ。これからは、国立公園の環境容量のなかに収まる事業をやっていく必要がある。今の器のなかで、観光の質を高める余地はいくらでもある」（崎野さん）



神秘的なたたずまいの然別湖。湖畔の人たちには計画を疑問視する見方が強い

体験観光を手がけてきた人の言葉だけに説得力がある。土幌町などは、こんな実践にもつと字んではどうか。

「土幌の努力を見れば、都会での開発反対とここでの問題は違う。町民が熱望するのなら、道路を認めてもいいのでは。運動のターゲットは道路だけだが、山の上まで草地開発することを、なぜもつと問題にしないのか」

地域づくり活動にも熱心に取り組む土幌町の六十代の商店主が、こう言つて「道路容認」を口にした。が、突っ込んで話をしてみると、

「公共投資するなら別なもの」との受け止め方がある。近いというだけで、あつてもなくてもいい道路だね」と漏らす。消極的容認なのである。

同町のある酪農青年は「うちの町民

は傍観者の立場」と言う。全線トンネル案の起点は土幌町内であるにもかかわらず、である。

夏になると「ヌブカの里」で開通促進に向けた祭り行事が行なわれる。隣の土幌町の農民運動組織から協力要請があり、応援に行つたこともある。

「土幌側の『何とかしよう』という気

住民たちの自由な論議の場を

高原道路の着工から三十四年、延伸工事が中断してからも二十四年にもなる。この道路の必要性や将来の地域づくりに対する有効性などについて、「地元」の住民同士がじっくり論議することが大切ではないだろうか。

この問題をめぐっては、地元や道、環境庁などの行政機関と自然保護団体の論争という構図が、あまりに強すぎたように見える。むろん保護論争は重要であり、そのことで環境破壊にブレーキをかけた功績は大きい。が、双方の主張が平行線をたどり、長期化すればするほど、一般住民には攻防が空中戦に映つてしまい、傍観者になつて

いる面が強い。仮に将来、道路計画が白紙に戻ることになつたとしても、こ

持ちは分かる。でも、この十年来、土幌に飲みに行つても、友人から道路の話が出たことはない。土幌町民は冷めていくのが実情で、推進派も不完全燃焼しているんじゃないかな」

というのが、この青年の見方だ。何人かの土幌町民の話聞いてみて、わたしも同じような思いがする。

れでは住民の間にシラけた気分だけが残つてしまふのではないかと。

「高原道路について、町政懇談会などで反対意見は出てきていない。改めて（賛否の）アンケートを取つたり、道路問題に絞つた議論の場を持つ気はない」（土幌町の幹部職員）

というような姿勢ではまずい。自由な論議ができる場を保証しつつ、例えばナキウサギや体験観光をテーマに、立場を超えて学習しあうような企画をやつてみるのもひとつの方法だろう。賛否双方の立場の人が一堂に会して、討論会を開いてもいい。そうした道を模索しない限り、この問題の真の解決策にはつながらないだろう。

△つづく▽